

Educo

地球時代の教育情報誌 エデュコ

2011年2月
臨時増刊号



特集「中学校・学力向上」

2 | 座談会「中学校における学力向上の取り組み」

8 | 学力向上の取り組み 実践例

秋田県 秋田市立桜中学校

東京都 荒川区立第三中学校

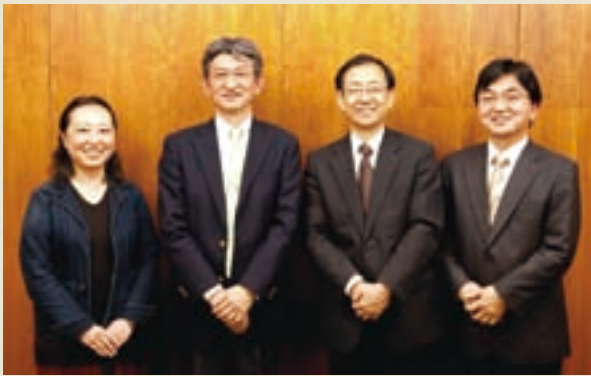
神奈川県 相模原市立大野南中学校

愛知県 愛知教育大学附属岡崎中学校

16 | 中学校における 学力向上への期待

(財)教育調査研究所 寺崎 千秋

中学校における 学力向上の取り組み



司 会

寺崎 千秋先生

(財団法人 教育調査研究所 研究部長)

出席者

国語科・笠井 正信先生

(東京学芸大学附属世田谷中学校教諭)

数学科・細尾 順子先生

(東京都目黒区立第七中学校教諭)

英語科・田口 徹 先生

(東京都千代田区立九段中等教育学校主任教諭)

新学習指導要領に向けた編成

寺崎 中学校の新学習指導要領の施行まで、あと1年余りとなりました。

今回の改訂では「活用」や、言語活動の充実、問題解決的な学習などが重視されています。それらが確実にできる授業力をつけ、生徒の学力向上を図ることが求められます。

まず、教育課程の編成に向けて、各教科の取り組みはどのような状況か、お聞きします。

笠井 国語科では、改訂の大きな柱は三つあります。

一つは時間数の問題です。内容は増えるのに時間数は1時間と少し増えるだけで、いろいろなひずみが出ています。

二つ目は言語活動例です。新指導要領ではかなり具体的に指示されていますが、それを今までの講義中心の指導過程の流れの中に取り込んで変えていくのは、内容面や時間的な面でかなり難しいと実感しています。

三つ目は、「伝統的な言語文化」です。古典の事項の位置づけが非常に明確になったので、古典指導に力を入れようという傾向があります。中学校で扱う古典の教材は、実は小学校でも扱うので、そのすり合わせ、

中学校での発展性をどう考えるのか、ということです。

以上の三点について、検討の余地が多く残っている状況です。

寺崎 課題は多いようですが、どのように対応していきますか。

笠井 この三つの柱を受けて、今後、学習内容の系統性重視や学習過程の明確化に因應だけの授業力が問題となってきました。しかし、どういう授業づくりをすべきか、現場ではとまどっているのが現実です。

寺崎 数学科ではいかがでしょうか。

細尾 今、研究会等で話題になるのは、実際に指導が始まっている、新しく高校から入ってきた内容についての、内容の扱いと評価です。

その中でも大きな問題は、今の若い教員が、中学でも高校でも教わらなかった内容があることです。自身が生徒としてどう教わったかを振り返って授業を組み立てることもありますから、若手教員は大変でしょう。

また逆に、中学校の内容が小学校に移っている部分もあります。今後は1年生にその知識があるわけですから、授業での言葉遣いや扱う例題など、今までよりレベルアップした教え方に移る必要があります。単に教える内容が増えたということにと

どまらない課題が生じていると、移行期間を通して実感しています。

寺崎 内容の移行については、算数・理科などにおいて小学校でも似たような問題がありますが、今お伺いして、改めて実感します。

細尾 本校では教科部会で、若手教員に、ベテランが今までの経験をこれまで以上に意識して伝達するようにしています。

寺崎 英語科はいかがでしょう。今回の改訂で、一番時数の増えた教科ですね。

田口 英語科は、現在の時数は各学年週3時間ずつですが、今回の改訂で、全学年週4時間になりました。

本校は既に週4時間以上でやっていますが、他の多くの学校でも、選択教科にあてる時間を学校選択という形でプラス1時間英語に充当し、新学習指導要領に備えているようです。

寺崎 それぞれの課題をどう解決するか、学校の姿勢や力量が問われますね。

「活用」をどうとらえるか

寺崎 今回の改訂では、学力の重要な要素である「思考力・判断力・表現力」を育てていくこと、そして、

課題を解決していくことに視点を当てる「活用」という学習活動への取り組みが非常に期待されていますね。

細尾 数学では、新学習指導要領では「数学的活動」がより一層重視されており、「活用」とはリンクする部分が多いんです。ですから、活用という言葉より、数学的活動を意識して授業を構成するのが現実的かと思っています。

数学的活動を通して学習が行えるようにするための手段として、思考力、判断力があると私は考えています。ただ、活用の力を伸ばすために、やりたいことは多いのですが、時間が足りないのが悩みです。

寺崎 1年と3年の時数が1時間ずつ増えたとはいえ、その分、高校の内容が降りてきていますからね。

細尾 ただ、工夫の余地はあると思います。一つには、50分の授業の中で「今日の授業では数学的な処理の仕方を活用する」といったキーワードを組み込むことです。どういう

発問で判断力を養うかなどの工夫が、さらに求められてくると思います。

寺崎 英語科は時数が増えますが、どのような指導が可能になるでしょうか。

田口 教科書でも、学習した表現を、自分のことに置き換えて発表すると

いう活動がかなり出てきています。教科書の文章の内容を理解し、音読して終わっていたところを、主人公や場所を自分たちに置き換えて書き、それを覚えて、一人一人発表させる。既習の表現を、様々な異なる場面です使うといった指導に時間を取れると期待しているところです。

寺崎 自分なりに書く時間、発表する時間が確保できるのは、非常にプラスになりますね。

国語科では先ほど、時数が厳しいとおっしゃいましたが。

笠井 活用以前に、漢字が書けない、話の流れが理解できないなど、前提となる知識・理解の部分の不足はいかんともしがたく、それらを習得する学習に追われているのが現実です。

ただ、生徒が何を学んだかを実感

寺崎千秋先生

するためには、課題解決的な学習活動を組み込むことが必要になってきます。その時間を生むために、知識習得的な指導は凝縮し、焦点化していくことが必要でしょう。

寺崎 例えば、どんなやり方が考えられるでしょうか。

笠井 従来のな指導形態では、例えば物語では、まず全体を読み、それから部分を丁寧に読んで、最後に鑑賞します。そこから脱却して、習得的な学習の段階で、「読みの学習」という大きな捉え方ではなく、「描き方を読む」「論理構成を読む」等、何を捉えながら読むか焦点化します。そうすると、追究・表現していくという時間のゆとりが出ます。教科書もそういう編成になってきますから、現場も徐々に変わっていくのではないのでしょうか。

寺崎 焦点化して読む指導をするためには、基本的な読みの力がないと、ついていけない生徒が出てくる可能性はありませんか。

笠井 知識習得的な学習では、何ができるようになったかという実感を具体的に持たせるように指導し、評価の工夫をするこ



とが大切だと思います。このことができたなら、次にこのやり方を課題解決学習に生かそう、という意識を持たせることが必要でしょう。

寺崎 中学生になると自己評価もかなりできますから、学習して、これができるようになったという実感が持てるというのは、やる気を起こすうえでも大事なことです。

「言語活動」をどう指導するか

寺崎 指導要領改訂のもう一つの大きな視点は「言語活動」です。国語以外の教科で、国語で身につけた成果である言語能力や言語活動を活用し、その教科の特質を生かしながら言語活動を充実させる。それが思考力・判断力につながるということなのですが、それぞれの教科の現状や課題などについてお聞かせください。

田口 英語科では、基礎を学ぶためのドリル学習などはどうしても必要ですが、そこで終わっては、英語という言語を習ったことが何に生きているかがわからないままになってしまいます。ですから、「こういう場面で必要だから、やはり基礎は大事なんだ」と感じさせる授業が必要ですね。ドリルをやった後で、その例文

を本当に自分の言いたいことに置き換えて使ったり、ある程度まとまりのある文章を書いて表現したりする場面を設ける。時数が増えた分、そういう機会を増やすことが大切になると思います。

本校では、中1の段階から、10文ほど、箇条書きではなく、文と文のつながりを考えながら書き、発表させるといった活動をさせています。音読やスピーチなどの実技テストも実施して、基礎が生きていることを実感させ、モチベーション上昇を図るようにしています。

寺崎 そのような学習には、やはりもととなる国語力が必要ですが、小学校でこれぐらいのレベルの授業を受けている、中学の国語の教科書にはこう載っているなど、先生方はどの程度、生徒の国語の力を把握されているでしょうか。

田口 正直に言って、そういうところまでは意識せずにやっている先生が多いと思います。

寺崎 新学習指導要領で、国語の解説書の中に言語能力・言語活動の系統表が出ていますが、小中学校9年間で、かなり高いレベルの言語能力を身につけるための言語活動の学習をやっていくことがわかります。国

語の教科書を見ると、教材として、そのことが詳しく出ています。生徒の実態、学習経験を踏まえた授業のためには、これをよく知っておく必要があるでしょうね。やっているはずなのに身につけていないということも、よく見えてくるのではないかと思います。

田口 今回の英語の改訂でも、母語と比較しながら効果的に指導するという項目があります。英語が苦手な生徒は、日本語と英語の文構造が全然違うということに気がついていないんです。例えば、修飾関係だと、日本語は名詞に対して、短くても長くても常に名詞の前に来ます。ところが、英語は情報が込み入っていると、その情報が名詞の後に来ます。そこで、日本語の情報をまず与え、英語と比べる中で、英語とはこうなっているんだと理解させる。それには、日本語の力も必要になりますね。

今、英語の授業は、できるだけ英語で指導するという方向です。しかし、複雑な内容では、日本語の活用が鍵になってくるでしょう。英語の授業の中で、教師の側も日本語をい

かに上手に使うかが、これから非常に求められるということです。

寺崎 日本語と関連させて英語を理解させ、日本語と英語の違いに気づかせるなど、生徒の視野を広げ、ものの見方や考え方を身につけさせていくというのは重要ですね。

日本語の活用について、数学ではどうですか。

細尾 数学での言語活動については、教える側が、国語や英語など他の教科での言語活動と数学での言語活動は何か違うのか、または何がどう共通なのか、ということを明確に意識しなければいけないと感じます。

例えば、「証明」の問題を解くときの、発表や答え合わせを工夫してみました。まず、生徒の一人が黒板



笠井正信先生



「発表させる」ことが目的ではなくて、「発表することで何がわかったか」が大事なんですよね。発表することで、数学のある真理について追究できたとか、英語のこういう言葉の特色がわかったとか、実感を味わわせるような仕掛けをつくっていないと、「言語活動の充実」という題目に振り回される気がします。

発表し合いやグループの話し合いは、子ども任せになりがちです。教師がその言語活動にどうかかわっていきけるかがますます問われてくるでしょう。この内容について、こういう学習活動を通して、何ができるようになるのかを明確に持った授業づくりをしていくべきで、それが今まさに課題になっています。

寺崎 小学校も同じ状況で、言語活動が優先になり、肝心の教科の本質の指導がおろそかになってしまうケースが散見されます。つまり、「言語活動の充実」の裏で危惧されるのは、言語活動そのものが目的化してしまうということですね。

笠井 言語活動で培った技能が、その後に生きているかどうかが指導の鍵になりますよね。先ほど細尾先生がおっしゃったように、「ある数学

的言語を用いた表現をさせる」という意識が教師にあれば指導できると思いますが、そういう意識が不明瞭なまま進むことが、これから危惧されることではないでしょうか。

細尾 そのとおりですね。話し合いなどをさせた後に、何をどう獲得させたかを、指導者が視点を明らかにして、それを生徒たちにも気づかせなければいけない。授業の押さえ、まとめ方の工夫がさらに必要になると思います。

学校全体で学力向上に取り組む

寺崎 それでは、学校としての学力向上の取り組みについてお話を伺います。田口先生の学校は、区立の中等教育学校ですね。

田口 本校では、入試ではなく、適正検査という形で入学してくるので、生徒間の学力差はあります。学校の方針は、いわゆる「落ちこぼし」と「伸びこぼし」をつくらないということですが、一斉授業では、伸び悩む子はどうしても出てしまいま

す。ですので、単元テストで到達度の低かった子には、週に1回、大学生のボランティアも入って、放課後スタディを行います。

授業に物足りなさを感じる「伸びこぼし」の対策では、例えば英語では、全校的に英語検定を受けさせて、さらに上の目標を持てるようにしています。1年生から英検3級や準2級以上をとる子もいます。専任のネイティブの先生もいるので、放課後、イングリッシュサロンを開き、英語を使いたい子はどんどん使う機会を設けるなど、やりたい勉強を先に進められるように工夫しています。

寺崎 目標をもってより向上することを自らめざすことは、これからの

田口 徹先生



子どもに必要なことです。そういう機会を、学校をあげて工夫しているということですね。

細尾 本校でも、国数英の3教科でキャリアアップ教室という放課後の指導をやっています。区から学習指導員の方が来て、日ごろの授業や宿題、さらに塾の宿題でも、勉強したいことを教えてもらえるという形をとっています。

例えば、キャリアアップ教室で各種検定の勉強に取り組み、自分の力が何級合格など目に見える形になり、次の級にチャレンジする意欲をもちます。他にも、家で一人で問題集に取り組んでもなかなかほかでもないが、キャリアアップ教室でヒントをもらいながら取り組むと解ける問題が次々に増えるなど、日ごろの授業にも相乗効果となって表れます。

また、同じく国数英では少人数授業を取り入れています。その形態はいろいろです。英語は習熟度別で、数学では、均等割りの形にしています。ただ、単元の終わりの数時間は、基本クラスと応用クラスに分けています。普段の授業では時間が限られているため、学習が遅れがちな生徒にはもっと基本的な練習を数多く積ませたい、または、学習が進んでい

る生徒にはより発展的な問題を扱いたい、といったことがなかなかできません。単元の終わりには、生徒の能力に大きな差が生じてしまうことが往々にしてあります。この段階で、生徒の能力に合わせた授業を行うことで一人一人の生徒にとってふさわしい学習に取り組めます。

田口 本校も少人数授業で、以前は習熟度別でしたが、今は中1・中2は行っていない。1クラス、ホームルームは40人ですが、英語と数学の授業は半分の人数でやります。学力の異なる子が混在する中で、その教科を苦手な子が、得意な子の発表を聞いて、いい影響を受けるといふよさがやはりあるんですね。ですから、完全に習熟度で分けてしまったとき、特に、習熟度の低い子の集団が伸びなくなってしまうことがかなりあります。特に英語のような語学の場合は、ペアやグループで活動することが多いこと、中1・中2の低学年では学力差も大きくなく、生徒同士でカバーできることなど、学び合いが非常に大事だという反省があり、今は均等割りになっています。生徒同士の影響のし合いは、我々が考えている以上に大きいですね。

笠井 本校は、木曜日は8時間授業

なんです。2時間続きのコマを4コマ、1コマ100分です。100分の授業をやると、授業が変わります。普通の授業では生徒が飽きてしまいますから。課題を子どもたちがあれこれ話し合いながら追究し、そしてそれを表現するという、一連の学びの活動が展開できます。

落ち着いて学ぶ、ということを考えると、中学校でも50分は短いと思うことも多いです。調べ学習の途中で終わってしまったって、続きは三日後などということもありますから、じっくり学んでいるという実感をもたせる時間割編成の工夫が、やはり必要かと思っています。

寺崎 はいそこまで、とあわただしく区切らず、じっくり追究する時間を保障していく試みですね。

笠井 子どもが学習に熱中してきたときには100分でも短いぐらいです。人間は集中しているときは時間を忘れますから、本当にもう100分たったの、という顔をしていますね。逆に講義形式でやったら絶対もたないでしょう。



寺崎 それでも100分集中してやると、結構疲れると思いますが、次の授業もまた100分だと、集中力がもたないということはありませんか。

笠井 だから木曜日は生徒も先生も大変です（笑）。しかし、例えば国語の「学校図書館の活用」という授業では、司書と協力して、調べに行く子たちと、こちらで指導するグループというように分かれて指導することもできます。100分あると、授業の中で調べに行つて帰ってくる時間がとれるというメリットがありますので、このようなことを1週間の時間割の展開の中でうまく使っていけば、学力向上に生かせるだろうと思います。



寺崎 これは、一担任でできることではなく、カリキュラムや時間割の編成を工夫することが必要であり、教師全員が知恵を出すことが大切ですね。それがあって学校全体として展開できた例ですね。

では、今後の課題について、ご意見をお聞かせください。

田口 最初のほうでもお話ししましたが、中学校の教員としては、生徒が何をどの程度やって入学してくるのかをまずきちんと把握することが不可欠だと考えています。すべての小学校で外国語活動が実施されるようになりませんが、実は、小学校の英語ノートでどんな表現をやっているか、中学校の先生は驚くほど知らないんです。今までと同じような形で

スタートしたのではロスが大きすぎます。

また、今までと違い、既に英語という教科への興味を失っている子もいる、ということも考えておく必要があります。英語に限らず、小学校での学びの実態を中学教員がもっと知るようにしていくことが重要でしょう。

新学習指導要領では、英語は、国語よりも総時数が多くなりました。単元もあまり増えずにこれだけの時数増ですから、子どもたちにそれなりの学力をつけていくことが求められます。今までの学習指導要領の歴史で、時数は増えたり減ったりしていましたが、これで学力をつけられなかったらまた減って、もう増えることはないでしょう。英語

の教員は、結果責任が求められることを肝に銘じる必要があると思います。

笠井 私は教員養成大学の附属校に勤務していますから、小中高でつながった研究会が月1ぐらいあります。そのおかげで小学校や高校の授業を見る機会が多いんですが、そうするといろいろ

な実態が見えてきます。

最近では、小学校で古典の指導を先取りで受けてくるようになり、一方では高校から、古典嫌いをつくらないでほしいと言われています。こういう中で中学の独自性をどう考えるか。そのために、小中高でいろいろな授業を見合ったり、情報交換する機会をもったりすることが、きわめて大事だと思います。同じ国語科でも、中学校だけの教科別研究会の集まりや研修しかない自治体が多いですから、小学校や高校とのつながりをどうもっていくか、検討すべきだと思います。

寺崎 小中高の校種間の連携の重要性が、改めて課題として浮き彫りになったように思います。

細尾先生、いかがでしょう。

細尾 若手教員が増えている現在、若手教員へのレクチャーが今後ますます大切になりますね。東京都がOJT実現を強調したこともあり、本校も意識して取り組んでいます。初めて3年生の担任になった教員には、進路指導主任が細かくレクチャーをします。三者面談の後、保護者とのやり取りを聞き取って、きめ細かにアドバイスします。また、高校の進学説明会にも若手にベテランが同

行し、説明会の聞き方などをその場で教えています。教科に関しても、毎日の授業の情報交換の機会を短い時間でももつようにしています。

教科では、これからの中学校の数学教育に何が求められているのか、ベテランも若手も具体的な内容をしっかりと理解し、目の前の生徒にどのような指導をするのが一番適しているのか、そういった視点をもつことが重要だと感じます。

寺崎 先生方が、まさに今求められている、「一人一人の生徒がいかに意欲的に学習するか」を大事にされていると改めて感じました。

このことについては、学習指導要領総則では、一として、子どもの興味・関心を生かした自主的・自発的な学習の促進、二、学習の見直しや振り返りの指導の充実、三、よさや進歩の積極的な評価や学習意欲の向上につなげる評価などを重視しています。これらについても学校・教師が、一層取り組みを充実させることが期待されることです。

貴重な取り組み例と今後のあり方をお示しいただき、ありがとうございます。本日お話しいただいた実践例が、読者の各先生方のご参考となることを願っています。

自分をひらく 力を高める

秋田県秋田市立桜中学校

校長
高橋 ゆり子

共通実践課題とゴールの設定

22年4月に桜中学校に赴任し、生徒一人一人の学習への意欲や規範意識が高く、資質や道徳性に優れていることに感心した。一方で、指示待ちの傾向が強く、たくましさに欠け、コミュニケーションへの意欲がやや低く感じられるという心配な面もあった。そこで、生徒の実態を明確にするために、これまでの諸調査で課題となっていた項目について、再度アンケートを実施し、分析したところ、次のような結果が得られた。

○グラフから

・自尊感情が低く、主体性やたくましさに欠

ける。

・周囲と積極的にかかわろうとする意欲が低い。

○過去の諸調査から

・教えられたことを自分で理解する力は高いが、わかったことや自分の意見を、相手にわかりやすく伝える力が不足している。

生徒の側の実態と課題の要因として、教師側の授業観や指導方法にも課題があることも見えてきた。

○本校の教師の指導傾向から

・ベテラン教員が多いので、これまで確立した自分の指導方法を変えることが難しい。
・生徒の先回りをして指導することがあり、結果、生徒が言葉を飲んだり、行動を躊躇したりしている場面が多く見られる。

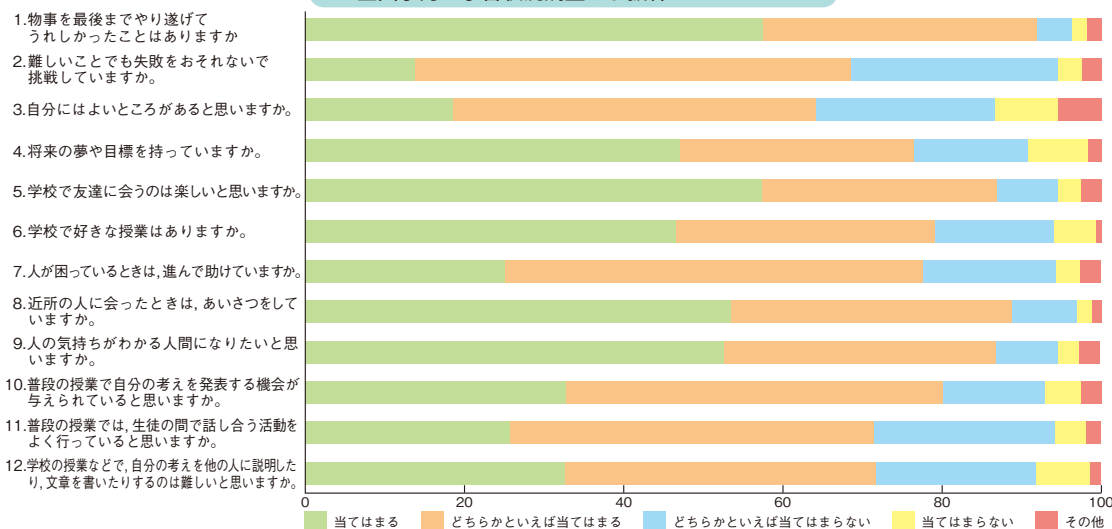
・授業や生活の様々な場面で、教師主導型の指導がなされることが多い。

以上のような実態を踏まえ、今年度の共通実践課題を「自分をひらく力を高める」と決め、学校をあげて取り組むことにした。ゴールでの生徒の姿も、①自信をもって伝える②柔軟に受けとめる③互いに学び合って、挑戦する、と具体的に3点設定した。

授業でひらく

共通実践課題のゴールに向けて、授業こそが、生徒をひらかせる最高のチャンスととらえ、次のことを共通確認した。

全国学力・学習状況調査から抜粋 対象：全校生徒



①生徒の言語活動を重視し、自分の思いや考えを言葉で表現する場面を設定する。

②生徒が互いに学び合い、高め合うことがで

きるように、学習形態を工夫し、ペアやグループワークなどを取り入れる。

③教師が子どものがんばりに気づき、言葉に出して認め、励ます。

各教科の特性を踏まえつつ、これらを意識しながらの授業実践であったが、参観のたびに、小グループで話し合ったり、生徒自ら説明に立ったりする姿が見られた。「教師主導から生徒主体へ」とは言い尽くされた言葉であるが、実践するにはなかなか難しい。せっかくグループになっても、人に教えるのは損という考えの子がいたり、わからなくても聞けないでじっと我慢している子がいたり、ついには、おしゃべりタイムになってしまったりと、なかなかスムーズには進まないことも多かった。ひらかせることの難しさを感じた。

研修でひらく

7月と12月に実施した校内授業研修会はワークショップ型とし、日ごろの実践やこれまでの経験をもとに、互いの授業観を交換し、刺激し合う会となった。中学校の授業研究会は、いかに教科の垣根を越えるかにかかっている。教科によって、指導内容や方法に違いや独自性はあるが、少なくとも、「言語活動の充実を窓口に表現力の育成」を目指したものであることは共通理解されていた。

そこで、研修会の視点としては、①かわり合いの場面の効果的な設定 ②学習環境の工夫 ③ねらいに迫るための言語活動の効果的な設定、の3点を設け、これらについて、よかった点、課題となる点を書いた付箋紙をもとにグループ協議を行った。課題は、

①の「かわり合い」に集中した。

・かわり合いの場面で教師は何をすべきなのか。

・効果的なかわり合いにするためにはどんな工夫があるのか。

・必然性のあるかわり合いをもたせるにはどんな手立てがあるのか。

教科も、経験年数も、性別も飛び越えたこの話し合いは、日ごろの悩みに対する共感を得たり、解決の糸口を見いだし合ったりすることができ、教師をひらく場にもなった。

意識の共通化から実践の共通化へ

研修会の最後には、教頭からの情報提供という形で、生徒同士の小グループでの学び合いについて、意義や指導方法等の話がされた。ここまで1年間の授業実践や職員間の話し合い、研修によって、教師の意識もだいぶ変化してきた。しかし、学び合いの意義や重要性は理解できるが、実際には今ひとつ踏み出すことができないまま、年度を終えるのがこれまでの常である。今年度は、残り3カ月で何ができるか、まずやってみようと呼びかけた。

①1・2年生の座席の配置を変え、男女4人の小グループが確実に作られるようにする。

②グループ学習のルールを徹底して指導する。

③グループで解決を図る意義のある課題を必ず準備する。

④学び合いが成立しない生徒をつなぐという教師の役割に徹する。

今までしてきたことであっても、今度は、理論や意義・目的を学んだうえで、みんなやってみる。実践を共通化することで、新たな課題もまた見えてくる。このような教師相互の学び合いのシステムの構築が、今年度の大きな成果だと考えている。生徒をひらかせるために働きかけた試みは、私たち職員をひらく力となってきた。

人的ネットワークを生かした「学ぶ力」の向上

東京都荒川区立第三中学校

主任教諭（進路指導主任）

佐瀬 順一

夜間学習会「三中てらこや」

本校では、荒川区パワーアップ事業の予算を活用し、平成20年9月から「三中てらこや」と銘打った夜間の補習授業を実践している。時間は、19時から20時30分までの90分間。毎週2日、火曜日は英語、水曜日は数学を開講している。生徒の参加費は無料である。

講師を務めるのは、将来教師を目指している大学生や大学院生のティーチングアシスタント（以下TA）。荒川三中には現在22名の

TAが登録されており、毎回のてらこやではそのうちの6〜7名が指導に当たっている。

3年目を迎えた平成22年度は、1回平均80名から90名の生徒が参加している。生徒は、基礎学力定着コースと、検定受検対策コースに分かれて学習する。コースは申し込み時に自分で選択する。

基礎コースでは、教室前の専用ラックに用意された、自分の学習レベルに合わせたプリント使って学習する。分からない問題があれば、教室にいるTAにいつでも質問できる。また、定期テスト前には、教科書や、授業で使用している問題集を持ち込んで学習することもできる。一教室は多くても15名程度の少人数編成であること、また、自分と年の近いTAに教えてもらえることで、生徒の学習意



▲「三中てらこや」の様子

欲が喚起されるのではないかと感じる。

解答が終わったプリントは、ボランティアの保護者が務めるコミュニケーションチャーターによって採点される。生徒にとっては、友達のお母さんやお父さんに採点してもらえる安心感があり、保護者にとっては、地域の中学生と自然な関わりがもてるメリットがある。

平成20年の1学期までは水曜日の放課後に補習授業を行っていた。しかし、放課後15時30分から17時30分の時間帯では、部活動に参加する生徒が受講できなかった。夜間補習授業を行うことで、そのデメリットは解消され一気に受講生が増加した。

また、夜間の実施ということ、登下校時の安全面にも配慮している。



▲「三中てらこや」での採点

まず、毎回のてらこやには、教員が2名当番制で配置されている。教員は、参加予定の生徒が登校しないときの電話連絡や、急病等、緊急時の対応を行っている。さらに、てらこや終了時にはメールによる情報配信システムを使い、すべての受講者の保護者に連絡をしている。また、帰宅時間に合わせて学校周辺の町会パトロールの協力もある。「三中てらこや」は、地域に支えられている事業であると言える。

「あっそうか！分かった！」と夜間の教室に響く生徒の声。参加した多くの生徒にとって、学習習慣の確立や基礎基本の定着につながっていると考えている。

ティーチングアシスタントとの協働授業

先に述べた、「三中てらこや」で講師を務めているTAは、通常の授業にも参加している。TAは、教師が授業を進めている間に机間指導を行って、授業内容を理解しにくい生徒への助言や、問題の解き方のアドバイスを行っている。

TAを務める学生にとっては、数多くの授業を参観することで、将来、自身が教壇に立つたときをイメージし、授業力向上を図ることができる。また、本校の教師にとっては、複数の指導者がいることで、チームティーチングに近い、きめ細かな授業が展開できるメ

リットがある。

学校図書館コラボ授業

荒川区のすべての小中学校には、図書館指導員が、月曜日から金曜日の5日間、毎日勤務している。図書館指導員は、保護者ボランティアの力も借りながら、学習センターとしての図書館の整備を行っている。さらに、本校では、学校図書館の書籍、資料を活用して、教師と図書館指導員との協働授業（コラボ授業）を全教科で展開している。

実践例として、私が担当する国語科のコラボ授業について紹介する。教育出版発行の教科書2年生の教材に『夏の葬列』がある。その最後の授業を図書館で行った。図書館指導員が『大人になれなかった弟たちに…』米倉



▲コラボ授業

斉加年著（偕成社）を読んだ後、教師が、挿絵と本文を組み合わせるアニメーションを行った。その際、なぜ、その挿絵を選んだのか、理由を自分の言葉で説明することを指導した。最後に、戦争に関わる本のブックトークを図書館指導員が実施して授業を終えた。授業後の休み時間には多くの生徒が紹介した本に手を伸ばしていた。

「本を読むと学力が向上するから、一冊でも多く読みなさい」と教師が指導するだけでは、生徒の読書量はなかなか増えない。生徒が、自然に本を読みたくなるような仕掛けが必要である。

学力向上のキーワードはネットワークの活用

以上、本校の学力向上を図るための三つの取り組みについて紹介した。この三つに共通するキーワードは、人的ネットワークの活用であると考える。

学力向上には、生徒の学ぶ意欲の喚起と、機会を捉えた多様な学びの場の提供が必要である。そのためには、教師だけの力では限界がある。教師を目指す大学生（TA）、保護者、地域の方々、図書館指導員等、教師以外の職員。多くの人と人とのつながりをフル活用して、今後とも、生徒一人一人の「学ぶ力」の向上を図っていきたい。

「シラバス」が 学校を変える

神奈川県相模原市立大野南中学校
研究主任
原田 敬一

学びの基礎・基本

平成14年度学習指導要領実施を契機に、15年度からシラバスの作成・利用を始めた。それに先立ち、13年度より、生徒が主体的に学びいくことをより具体的にめざすため、学校教育目標を見直し、これからの社会を心豊かに、また自らの可能性を拓いていく「生きる力」を育てる教育とは何かを問い直す取り組みを始めた。学びの基礎・基本は生徒の知的興味や心揺さぶる好奇心を芽生えさせ、広く想像力を巡らすようになることととらえ、それは教科学習の中にこそあると考えた。また、14年度から続く教科の指導計画や評価規準の

作成と見直しは、「学び」とはどのようなことなのかを共有化し、指導法や学習評価について認識を改め、確認し、授業のあり方や指導法について見直していくことであった。

生徒の活動は連動する

「学びは教科から」の考え方を基本として、教育課程のすべての活動を見直すこととなった。本校が生徒に期待する「変化する社会の中で自らの道を創造的に拓いていく力」を育てるためには、二つの要素を一体化した教育課程の創造が必要であった。

一つは、教科の基礎的・基本的な知識と学習から受ける多様な感性が、個性と調和統合すること。二つには、ものの見方や考え方を基にして具体的に組み込む体験をすること。このような視点から、知力の育成ともいうべき教科での学びを、総合的な学習の時間、選択教科と連動させて位置付けた。感性の基盤を醸成し、学び取る力、判断し実行する力を伸ばすことをそれぞれの領域に組み入れた指導計画の作成がなされ、16年度以降は、道徳・特別活動の指導の中でも具現化の取り組みが進められた。

教師が、授業準備と学習ガイダンスを前提として臨むことが、生徒の意識を高め、学びいく姿を支援していくことになる。この考え方を明確にする一つの取り組みとして、総合的な学習の時間の一部を「トライ・やるタイ

活動（本校は自治活動と呼んでいる）、生徒が創る学校環境（昇降口に学年目標、学級目標、行事の目標を掲げる等）、学校行事（縦割り6色対抗の体育祭・連動した合唱発表会と、それらに関連した集会や準備活動）等、教師が陰で支えることで、先に述べた二つの要素が結果として現れ、生き生きとした生徒の活動が日常化されてきた。

なぜシラバスなのか

指導計画とともに評価規準が作成され、これを生徒の学習への意識付けとするために重要なものとなったのが、シラバスの作成であった。年度末に各教科で話し合い、シラバスを作成してきた。

本校がめざしたのは、①各教科の学習が学校教育目標のねらいを具現化できる手だてをどのように持つかを示すこと。（学校教育目標が目指す三つの力への対応）②年間の学習内容の概要を生徒・保護者に理解していただくこと。（説明責任と指導と評価の一体化の考え方を示す）③学習評価はどのような手だ



ム」と名付け、生徒を中心とした活動ができる場面を創出した。生徒の活動が主となり意欲が持てる生徒会

学年・教科		第1学年 理科	
授業場所	教室・理科室	指導教諭	
「三つの力」の育成重点		〈感性・感じ取る力〉自然の尊さを感じ取る意識をもつ。 〈思考・学び取る力〉実験・観察を通して考える力を伸ばす。 〈知恵・判断し、行動する力〉自然との関わりを理解し、自分の行動を考える。	
教科目標		自然に対する関心を高め、目的意識をもって観察、実験などを行い、科学的に調べる能力と態度を育てるとともに自然の事物・現象についての理解を深め、科学的な見方や考え方を養う。	
指導計画	学習内容		学習のねらい
	1学期	植物のくらしとなかま〔2分野上〕 ＊植物はなかまをどのようにふやすのか ＊植物が生きたるために必要なデンプンなどのようにつくっているのか ＊植物が水や養分のとり入れかたや体のすみずみまで運ぶしくみはどうなっているのか ＊いろいろな植物を特徴からなかま分けしてみよう	○身近な植物についての観察・実験を通して、生物の調べ方の基本を身につけ、なかまの増やし方、体のつくりとはたらきを理解し、植物の種類やその生活についての認識を深める。 ※ルーベの使い方、生物学的スケッチの方法を身につける。 ※顕微鏡の操作方法を身につける。 ※プレパラートの作り方を身につける。
	2学期	身近で起こる不思議な現象〔1分野上〕 ＊光の進み方とものの見え方について ＊音の発生の仕方とその伝わり方について ＊力のはたらきや圧力について	○身近な事物・現象についての観察・実験を通して、光や音の規則性、力の性質について知る。 ※凸レンズの性質を調べる実験を行う。 ※実験レポートの方法・結果・考察の書き方を身につける。
		身のまわりの物質〔1分野上〕 ＊物質の性質を利用して物質を区別してみよう ＊気体の性質を利用して気体を見分けてみよう ＊物質の状態変化を利用して物質を見分けてみよう ＊水溶液の性質を利用して物質を見分けてみよう	○身のまわりの物質についての観察・実験を通して、固体や液体、気体の性質、物質の状態変化について理解するとともに、物質の性質や変化の調べ方の基本を身につける。 ＊ガスバーナーの使い方を身につける。 ＊各種実験器具の使用方を身につける。 ＊指示薬の使い方を身につける。
	3学期	活きている地球〔2分野上〕 ＊火山がどんな岩石からできているか ＊地層はどのようにしてできるか ＊地震はどのようにして起こるか ＊大地の変動はどのようにして起こるか	○大地の活動の様子や身近な地形、地層、岩石などの観察を通して、地表に見られる様々な事物・現象を大地の変化との関係について知る。 ＊火山岩と深成岩の鉱物の特徴を観察して岩石の特徴を見分けられるようにする。
評価方法		学期評価について 関心は、学習活動中の観察、ワークシート、観察・実験レポート、ノート、小テスト、単元テストで評価します。 思考は、ワークシート、観察・実験レポート、小テスト、単元テストで評価します。 技能は、学習活動中の観察、実技試験、ワークシート、小テスト、単元テスト、観察・実験レポートで評価します。 知識は、観察・実験レポート、ワークシート、小テスト、単元テストで評価します。 定期試験について 4観点で作成します。 学期評価の割合は、関心（20%）、思考（30%）、技能（30%）、知識（40%）です。	
学習方法		教室での授業、及び理科室などでの実験、観察（校舎外なども含む）	
宿題等		レポート作成やワークシートでの課題、問題演習など適宜出る。	
その他		○ワークシート、レポートなどは必ず保管しておく。（見直しやノートやファイルの提出がある） ○資料集は学校に置いておいてもよいが、授業には必ず持ってくる。	

◀平成23年度 理科シラバス（1年）

と資料活用がなされるのかを知ること、生徒が主体的に学習に取り組むようにすること（教科毎の評価の具体的手だてや資料・場面、割合を示す）。つまり、教師の授業改善、保護者の信頼確保、生徒の学習意欲向上という役割である。

シラバスの項目は、教科・学年毎に、年間の「三つの力」育成の重点、教科の指導目標・指導計画、評価方法と日常評価・定期試験評価の観点別割合、学習方法などである。指導計画には単元毎の学習のねらい、評価方法が

示されている。全学年・全教科の学習ガイダンスとして、計画的な学習ができるようにした。特に1年次では、保護者会でも「どういう内容をどう学習すればよいのか」「どういう評価方法で、どのような評価を行うのか」「わからないことやできないこと等があった場合にどのようにしたらよいのか」等の説明をしてきた。さらに、学期の初めや単元毎にガイダンスをする資料として利用している。

シラバスを学期や年度で見直すことは、指導計画・評価計画の見直しにつながり、同時に、わかる授業、興味・関心を高める授業をめざす指導法の改善や授業改善への手がかかりにもなる。また、教科テーマを設定し、授業改善の視点を意識した授業研究の日常化にも取り組んでいる。さらに、年度の初めには学習状況調査・全国学力調査を利用し、

観点別・領域別の実現・到達状況を分析し、学習の確認と評価基準の妥当性を点検し、指導計画・評価計画の見直しを行っている。

引き継がれる学校力を

本校が学びの基礎・基本ととらえた関心・意欲の向上は、

学力の向上、学校行事、部活動・文化活動の活性化となって現れた。生徒の学びの連続は、学校力ともいえる。しかし、経過とともに、シラバスへの理解の不十分さや内容の吟味の甘さなどが感じられた。授業に対する検証・評価の精度について、PDCAサイクルをしつかりと実施していきたい。

これまでの取り組みは、今回の改訂の趣旨に添うものであるが、さらに、学力の三つの要素を踏まえた評価の考え方と内容を吟味しなければならぬ。また、各領域、さまざまな教育活動をわかりやすく説明するシラバスを作成し、生徒、保護者、地域社会、教師が共通の基盤に立った教育活動を展開していきたい。

今年度、支援教育コーディネーターによる教師向けの啓発研修として、バリアフリーの教科授業、学級活動をテーマとした取り組みを新たに開始した。私たちは、学力向上を全面に出して、何に取り組むべきかを探ってきたわけではない。しかし、入学直後の1年生のよさは何か、足りない力は何か、わかる授業をどう進めるのか、という指導法の改善・授業改善を課題としてきた。

わかる授業、楽しい授業を創ることは、生徒自らが学びの高まりを覚えることになる。そのことが教師にとっても喜びとなる授業であらう。私たちはこのことを忘れてはならないと考えている。



学びを深め合う 追究授業

愛知教育大学附属岡崎中学校

研究主任

深津 伸夫

子ども主体の教育活動

本校では、子ども主体の教育活動を重視している。学年ごとの行事でも、その過程を見ることができ。

一年生のオリエンテーション合宿は、入学して間もない五月に行われる。その運営は、各学級から意欲的に集まった実行委員が中心となっており、活動の目的や内容を企画していく。何度も学級会や学年集会を行い、子ども一人一人の思いや考えを出し合う。自分の思いを伝えると同時に仲間の思いや考えを理解し、新たな仲間づくりの基礎となるばかりか、議論を交わすことの大切さにも気づいていく。



〈ブースセッション〉

提案者ブースを開設し、興味ある内容のブースに参加する

いく。

二年生の自然体験活動では、一年生の後半から半年以上の時間をかけ計画を立てる。実行委員会は毎日のように開催される。また、子どもの呼びかけから学級討論会や学年討論会が開かれ、活動の意義や、自分たちのあるべき姿を問い直す中に、仲間とともに正しい方向性を見つけ出す姿が表出してくる。

三年生の修学旅行も、子どもの手で創り上げる行事である。一年生から個々のテーマを決め、個人で進めてきた追究学習の集大成として位置づけている。さらに、追究内容の本質や真理に迫るため、その道を究めた方々との意見交流を求めて積極的に取材訪問に出かけ、自分の学びを問い直すとともに、広く世

に発信していく姿が見られる。修学旅行の夜には、追究に対する学年討論会が開かれる。徹底的に追究してきた個の学びを、自分だけの理解では満足せず、仲間を広げていきながら、互いに学びを深め合うことのよさを実感する姿がここにある。

わたしたちは、子どもが大きな目標を達成させるまでの過程を最も大切にしている。多くの子どもが集まれば、そこには多くの思いや考えが存在する。個々の学びが深まるにつれ、その子どもの思いや考えは、個人の中でより強いものとして形成され、価値観が生まれる。

わたしたちは、子ども一人一人の輝きをとらえ、その輝きが増すように支援をしていく。そして、子どもが、自分だけの理解で満足することなく、その思いや考えを出し合い、自他に問い直すことにより、確かな方向性を見いだしていくことができると考える。

これらの経験を積み重ねた子どもは、学びを深め合う価値を自覚し、自ら学びの深め合いを求めるようになる。これら学びを深め合うことの基礎は、九教科すべての中に取り入れられている。問題解決的学習過程を重視した授業にある。

将来につながる追究学習

九教科の三年間のカリキュラムに、適切に位置づけた問題解決的学習過程。この過程を

楽しんできた子どもは、教科の中の追究学習だけでは満足することができず、「もっと追究をしたい」と思いをふくらませることがある。わたしたちは、そのような子どもの思いや願いを見取り、個人追究をさらに進める場を保障している。ここでは、九教科の学習を活用しながら、九教科の枠を越えた追究学習が展開される。

九教科の枠にとらわれることなく、子どもが自ら見通しをもち、解決していく学びは、個人の追究学習を基本としている。子どもが、自分の将来を見据え、夢を探し、自らの可能性を切り開き、独自の学びの地図を描くことを願っている。そのために、わたしたちは、子ども自身が追究を方向づけ、決定することができるように対話を進めていく。

自ら未来を描く姿

子どもは、追究の過程において、他者とかかわりをもつことで、追究を進め、学びを深めていく。個人の追究学習の始まりは、インターネットや書籍を使った基礎追究が多い。そこから得た知識を基に、自分の考えをまとめていく。自らの考えが生まれると、それを誰かに伝えたい、語りたいという思いが高まり、提案し、交流する機会を求め始める。そして、同好の者が集まり、思いや考えを語り合い、自主的な学びの深め合いへと広がっていく。

自分の追究に対して、高まる思いがあるからこそ伝えたいとなる。語り合いたい仲間がいるからこそ、熱の入った討論となる。自然と練り広げられるこの学びの深め合いこそが、新しい自分を創る姿であり、次代を創る子どもたちの原動力となる。

そして、仲間の多様な価値観に触れ、新たな問題意識が生まれると、基礎追究を深化させるために電話取材や身近な人への取材訪問、さらには地域の方、その道の専門家への取材訪問など、追究は、校外へまでも広がりを見せていく。

また、異学年交流を意図的に構想していく。一年生は先輩からテーマ設定の仕方、追究学習の方法、取材訪問のポイントを学び、追究に見通しをもつ。

二年生になると、子どもが自らの追究学習の成果を発表する機会を、より多く求め始めるようになる。提案内容のおもしろさ、追究の確かさが認められ、



〈取材訪問〉 専門家を取材訪問し、自分の追究内容をより深める



〈異学年交流〉 追究学習を始めた1年生に、3年生が自らの経験を生かしアドバイスを
する

自分の追究学習に自信をもつ。同時に、根拠となる考えの不足や、考察の甘さを指摘されることで、さらなる追究への見通しをもち、意欲を高める。

三年生は、後輩からアドバイスを求められることで、今までの追究を改めて振り返り、価値づけ、新たな視点を得ることで、追究学習を深めていく。

このような経験を積み、学びを深め合う価値を実感した子どもは、仲間を巻き込んで、新たななかかわりや、学びの深め合いを求めていく。そして、追究学習で獲得した学び方は、九教科の授業の中に生かされ、さらに大きな追究学習を生み出していくのである。



中学校における学力向上への期待

財団法人 教育調査研究所

研究部長 寺崎 千秋



中学校の新教育課程への移行期間も残すところ1年となった。平成23年度の新教育課程全面実施に向け各中学校は準備できているだろうか。移行措置は漏れなく万全に進められてきたであろうか。また、基礎的・基本的な知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の能力の育成、学習意欲の向上など、生きる力の中核となる学力の育成に向けた新教育課程の編成や単元等の指導計画の作成などは着々と進んでいるだろうか。さらには、これらの学力を一人一人の生徒に身につけさせ向上させる授業力が更新されているだろうか。

生徒の学力を向上させるのは、生徒自身の意欲、努力や工夫が必要であるが、それを生み出し支えることも含めて、教師の授業力によるところ大である。新学習指導要領では、これまでの授業力に加えて、活用や探究の学習活動の充実や言語活動の充実、見通しや振り返りの指導の充実を求め期待している。これらを授業で実現しなければ、生徒の学力は相変わらず知識・

理解の定着に偏り、思考力・判断力・表現力等の能力や主体的に学ぶ態度などの育成はおぼつかなくなる。

最近のマスコミ等での論評によれば、今日の我が国の停滞の根本は、少子化・高齢化の進行にあるということである。この未曾有の状況をどう解決するのかは世界のモデルでもあるとしている。すなわち、解決のモデルはなく、自ら創りださなくてはならないのである。知識基盤社会という意味もこの視点から考えていくことが必要であり、今、求められている学力を育むことが新しい国づくりの礎となることを認識し、新教育課程の完全実施に着実に取り組んでいくことが重要である。

今回、本号での座談会での各先生方のご報告を伺っていると、皆さんはかなりの危機感を持ち、可能なところから学校挙げて取り組んでいることを実感し、心強く感じた次第である。それでも、個々には課題があるようで、今後の更なる取り組みを期待したい。



教育出版株式会社
取締役社長
小林 一光

今春には、新指導要領に基づいた新版中学校教科書の見本本ができ上がり、2012（平成24）年度から教育現場で使用されます。今年4月から使用される新版小学校教科書より、「学力」というキーワードが重視されています。昨年のPISA調査では常連の韓国、フィンランドがトップを占め、香港、シンガポールのアジア諸国も日本より上位にランクされました。

PISA調査では、読解力と数学的思考力が主な判定基準になっているようですが、「学力」とは、そもそも何を指すのでしょうか。事実を正確に理解し、その知識を身につける力、

ものごとの仕組みや成り立ちを論理的に思考し、応用実践できる力と言い換えられるかもしれません。しかし、そうした「学力」を真に身につけるためには、何かが必要ではないでしょうか。

当たり前とやり過ごしてきた知識や理論に、「なぜ、どうして？」という疑問をもち、改めて習慣的に自らに問い直し、問いかける力が必要だと思います。そうした力が身につくようにと工夫を凝らして、教科書を編みました。

見本本ができ上がりましたら、ご高覧いただければ幸いです。